

# 日蓮の時間意識

植 木 雅 俊

仏教の時間論と言えば、必ずと言っていいほど道元の名前が出てくるが、日蓮は道元と違い正面から時間を論ずることはなかったようだ。しかし、直接的に時間を論ずることはなかったとはいえ、間接的ではあれ明確な時間意識に裏付けされた発言が随所に見られる。そこから逆に、日蓮の時間論を推測することが可能ではないかと思われる。

道元の時間論は、永遠性を論じた純粹に形而上学的な時間論として展開されるが、日蓮の時間論は、永遠性に根差しつつも現実への関わりを強調するもので、歴史的であると言うことができる。それは、『法華経』に説かれたことを我が身で色読するということ、日蓮が生きている現在における、「今」「ここ」におけるこの「我が身」をどのようにとらえ、どのように振る舞うのかという形で出てくる。そのため、『法華経』に説かれた世界をそのまま我が身に確認するということでもあり、それは法華経の行者という自覚の深まりとともに具体化され、虚空会に象徴される時間として明確化

されるように思われる。それは、日蓮が最も重視した『法華経』における時間論とパラレルであるといってもよい。

『法華経』は、その会座に列座する人（舍利弗、富楼那、阿難、提婆達多など）の過去へと遡ることによって現在の位置付けをなし、その未来、成仏の記別が行われている。また、滅後の弘教を誰が、いかに、どのような状況下で行うかという問いかけもなされ、その未来、弘通というテーマの中で多宝如来という過去、仏が登場し、現在、仏である釈尊と二仏並座する。ここに三世が融合した姿で描かれている。

さらには、地涌の菩薩という久遠の過去より教化されてきた菩薩の登場と、それをきっかけに釈尊自身の久遠実成という本地が明かされ、未来の弘通が地涌菩薩に付属される。その弘通の過程には難は必定ということが明かされ、過去の具体例として不軽菩薩が、滅後（未来）のこととして六難九易、三類の強敵が示される。この『法華経』が説かれる所には必ず多宝如来が出現するとあり、法華弘通の行為は三世にわた

る歴史的行爲として位置付けられている。『法華経』は、この三世にわたる歴史的行爲としての法華弘通について、その主体者、およびその振る舞いを「如来使」「如来事」として表現している。『法華経』が「三世説法の儀式」と称された理由もここにあらう。また、紀野一義氏によれば、天は未来を、地は現在を、地涌菩薩と多宝の塔が出現したとされる地中は過去をそれぞれ象徴して、虚空は未来にも現在にも過去にもつながる世界を意味しているといふ<sup>(1)</sup>。

このように、『法華経』自体は、三世という時間の流れの中で弘通の在り方が論じられており、極めて歴史的事である。インド人が超歴史的思考法を常とすることを考えれば、特異なことである。それは、勸持品に僭聖増上慢の姿を、

或有阿練若 納衣在空閑 自謂行真道 輕賤人間者

と表現しているように、『法華経』が、空理空論をもてあそんだり、人間を軽んじたり賤しんだりすることの対極として、一切衆生の皆成仏道を説き、救済という実践、振る舞いこそ最重要であるという立場に立っていることと無関係ではあるまい。日蓮は、三世にわたってこのように意義付けされた『法華経』の弘教を身をもって行じている。

以下、法華経の行者の自覚とともに深まってく日蓮の時間意識を見ていくことにする。その日蓮も『蓮盛抄』(三三四歳)と『守護国家論』(三八歳)など初期の頃の著作を見ると、

此経を信する者は己身の仏を見るのみならず、過現未の三世の仏を見る事、淨頗梨に向ふに色像を見るが如し(定遺一八頁)  
 仏入滅既経三千年有。雖然信法華経者許留三仏音声時々刻々念々令聞我死由心不観一念三千偏照十方法界者也。  
 此等徳偏備行法華経者也(同一二頁)。

などと、仏と衆生との関係を述べる中で間接的に時間について触れているが、後に多出する「日蓮」を主語とする表現に比べると、一般論的な描写であることが分かる。

ところが、伊豆流罪を境として法華経の行者の自覚が深まり、「日本(閻浮提)第一の法華経の行者」という表明がなされる<sup>(2)</sup>。それは、平安時代から鎌倉時代にかけて世に横行していた持経者とは、一線を画するものであった。日蓮も四十一歳までは、「法華経の持経者」と自らを称していたようだが、伊豆で著した『四恩抄』(四一歳)の「昼夜十二時の法華経の持経者」から翌月の『教機時国抄』にかけて、その表現が「法華経の行者」へと一転する。その法華経の行者は

不顯三類敵人非法華経行者。顯之法華経行者也(同二四五頁)

と、三類の強敵と関連付けられている。さらに、『南条兵衛七郎殿御書』(四三歳)では、

日本国の持経者はいまだ此经文にはあわせ給はず。唯日蓮一人こそよみはべれ……されば日蓮は日本第一の法華経行者也(同三二

と、持経者と法華經の行者との違いを対比して論じ、日蓮自ら法華經の行者であると断定している。

こうした「法華經の行者」の自覚の深まりと、さらに佐渡流罪を機に日蓮の時間意識に裏付けられた言葉が表明されてくる。今という現在の捉え方が主体的な時間として描写されてくるのだ。その代表的なものが、流罪で佐渡へと向かう途次に寺泊で書かれた『寺泊御書』(五〇歳)であり、そこに、

法華經三世說法儀式也。過去不輕品今勸持品。今勸持品過去不輕品也。今勸持品未來可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>不輕品。其時日蓮即可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>不輕菩薩(同五一五頁)

と述べている。『法華經』は、三世という視点から、いかに法を説くかという弘通の在り方を述べたものであり、過去における不輕品の実践は、現在においては勸持品に説かれる三類の強敵との闘いとしてあり、今、日蓮が三類の強敵を顕していること、すなわち現在において「法華經の行者」であることが現在の勸持品である。それは、未来から見れば不輕品に相当し、その時は日蓮は不輕菩薩に相当することになる——と、このように述べている。ここに、三世の中で自己を捉える日蓮の視点を読み取ることができる。

さらに、『開目抄』(五一歳)においては、日蓮の佐渡流罪に対する弟子・檀那の疑問をきっかけとして、徹底して自ら

が法華經の行者であるのかどうか自問し、經文に我が身を照らして、ますますその確信を深めている。これは、『法華經』に説かれる過去・現在・未来の三世の中で位置付けられた歴史的使命を自覚する弘教者(法華經の行者)として自らを再確認したことであり、それが、『顕仏未來記』(五二歳)の

安州日蓮恐<sub>レ</sub>相承三師<sub>一</sub>助<sub>二</sub>法華宗<sub>一</sub>流<sub>三</sub>通末法<sub>一</sub>。三加<sub>一</sub>一<sub>二</sub>号<sub>一</sub>三國四師<sub>一</sub>(同七四三頁)

という表明となった。以上の意味では、道元も『法華經』を随分と引用して論じているけれども、『法華經』の精神を最も体現して行じているのは日蓮であると言えよう。

このように法華經の行者の自覚は、伊豆流罪を契機として表明されたが、より鮮明に自己と、自己のいる場(国土)を含めて積極的で主体的な時間として表明されてくるのは、佐渡流罪を境としているといえよう。そのような一節を次に拾い出してみよう。まず、『四条金吾殿御消息』(五〇歳)を見ると、ここでは直接、時間については論じられていないが、現在、自己がいる「所」が仏土として現れてくるということ、現在という時に意味を見いだすという形で、間接的に今という時を表現している。それは、次の一節の通りである。

今度法華經の行者として流罪死罪に及ぶ。流罪は伊東、死罪はたつのくち。相州のたつのくちこそ日蓮が命を捨たる処なれ。仏土におとるべしや……(同五〇四頁)

次に、文献学的には若干疑義も残されているようだが、参考として引用すると、『最蓮房御返事』（五一歳）には、

大事の法門をば昼夜に沙汰し、成仏の理をば時時刻刻にあぢは  
 う。如<sub>レ</sub>是<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>候へば、年月を送れども久からず、過る時刻も程  
 あらず……自<sub>レ</sub>劫初<sub>レ</sub>以来、蒙<sub>レ</sub>父母・主君等御勸氣<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>罪<sub>レ</sub>遠<sub>レ</sub>國<sub>レ</sub>  
 島<sub>レ</sub>之人。如<sub>レ</sub>我等<sub>レ</sub>悦<sub>レ</sub>び身<sub>レ</sub>に余りたる者よもあらじ。されば我等  
 が居住して修<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>行<sub>レ</sub>一<sub>レ</sub>乘<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>処は何れの処にても候へ、可<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>寂  
 光都<sub>一</sub>（同六二四頁）

とある。時間と空間を含めて、瞬間を永遠と開き、歡喜の生命のほとばしる思いに満ちたこの表現は、佐渡での日蓮の思いを語つて余りあるものと私には思われる。

次に、『観心本尊抄』（五二歳）には、

今<sub>レ</sub>本<sub>レ</sub>時<sub>レ</sub>娑婆世界離<sub>レ</sub>三<sub>レ</sub>災<sub>レ</sub>出<sub>レ</sub>四<sub>レ</sub>劫<sub>レ</sub>常<sub>レ</sub>住<sub>レ</sub>淨<sub>レ</sub>土<sub>レ</sub>。仏<sub>レ</sub>既<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>去<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>滅<sub>レ</sub>未<sub>レ</sub>來<sub>レ</sub>。  
 不<sub>レ</sub>生<sub>レ</sub>。所<sub>レ</sub>化<sub>レ</sub>以<sub>レ</sub>同<sub>レ</sub>体<sub>レ</sub>。（同七二二頁）

とある。これは、今という現在を「本時」と開覚する時、我々が住する娑婆世界は、三災を離れ、常住虚空の四劫を超越した常住の世界と現れるということであり、仏も生滅という現象を超越したものととなり、それは、化導される我々も同じであるというのである。ここに日蓮の時間意識を見ることができる。日蓮は、自己が生きている今・現在において法華經の行者としての生き方を貫くことによって、その現在を法華經に説かれる三世常住の現在を我が身に開き、そこに永遠

常住の世界（本時）を開いたといえよう。

このようなところから、『乙御前御消息』（五四歳）の「昔と今と一同也」（同一一〇〇頁）、『種種御振舞御書』（五五歳）の「在世は今にあり、今は在世なり」（同九七一頁）という言葉が出てきたのである。これは、「今がまさにその時である」ということである。『法華經』にも、「今正是其時」（方便品）、「今正是時」（宝塔品）とあり、日蓮も、「今既に時來れり」（同七九九頁）、「日蓮は今時を得たり」（同二七九八頁）と述べているが、いずれも法華經を弘通するという歴史的主体者としての「今」「現在」という時を意味している。

仏教の時間論は、有部の「三世実有」説にせよ、經量部の「過未無体・現在実有」説にせよ、究極的には現在こそ実在であり、過去といい、未来といつても、現在における過去についての記憶と、現在における未来についての予想・期待感としてあるということであり、結局それは現在としてあるということであり、「永遠の今」ということだ。

日蓮の時間意識も、その点は全く変わることはない。それは、『諸法実相抄』（五二歳）の次の一節にうかがうことができる。日蓮が上行菩薩として虚空会の儀式に参列していたのかどうかを自問して、

凡<sub>レ</sub>夫<sub>レ</sub>なれば過去をしらず。現在<sub>レ</sub>は見<sub>レ</sub>て法華經の行者也。又<sub>レ</sub>未來は決定として当<sub>レ</sub>詣<sub>レ</sub>道場なるべし。過去をも是<sub>レ</sub>を以<sub>レ</sub>推<sub>レ</sub>するに虚空会

にもやありつらん(同七二七頁)

と述べている。ここには、過去によって現在の自分を權威付けるのではなく、現在の生き方いかんによって、未来と過去を主体的にとらえていくという視点が打ち出されている。

こうした観点は、次の『御義口伝』(五七歳)においても同じである。

已とは過去なり。来とは未来なり。已来の言の中に現在是有るなり。我れ実と<sup>と</sup>成けたる仏にして已も来も無量なり無辺なり(原漢文、同二六六三頁)

これは、寿命品の「我実成仏已来無量無辺」について論じたものだが、一般には「我れ実に成仏して已来無量無辺なり」と読み下す。ところが、日蓮は右のように独特の読み方をしている。過去(「已」)も未来(「来」)も独立して存在するものではなく、現在を抜きにしてはあり得ないものである。このように三世を捉えたとき、一般的読み方は、遙かな過去の一時点として成仏の瞬間が示されているのに対して、日蓮の読み方は、現在において衆生(「我」)が無作三身(「実」)の仏の生命を開(「成」)いた時に、過去も未来も無量無辺の永遠なものとして開けるといふことになる。『御義口伝』は、文献学的に疑問視されているようだが、仮にそうだとした場合、この一節が日蓮の時間意識を歪めているとは思えない。

『法華経』は、現在の瞬間に(本因・本果・本国土)の三

日蓮の時間意識(植木)

妙を合するものであるといえよう。それは、現代的に言い換えば、永遠・常住の世界が現在において開けるといふことである。日蓮の言う「本時」とは、この三妙の合する時と云うことができよう。このように見えてくると、法華経の行者の自覚の深まりとともに、日蓮の表現が日蓮自身の体験した世界として常住の世界が描写されてくるのが分かる。それが、主語を「日蓮」とする描写が多くなる理由であろう。

法華経の行者の実践を通して、現在において虚空会に列座する。それは永遠・常住の世界であり、そこに大確信の歓喜・法悦がほとばしる。そしてまた、その永遠・常住の世界に列座しつつ法華経の行者の実践へと還ってくる。それは、何も日蓮に限ったことではなく、「所化もって同体なり」とあるように、弟子・檀那もまた、しかりである。三世にわたる歴史的使命を自覚した地涌菩薩の永遠・常住に根差した「今」という現在における実践がそこにあるのだ。

- 1 紀野一義著『法華経の探求』二四二頁(一九六二年、平楽寺書店)
- 2 定遺八二八頁、一〇一九頁、一〇四六頁、一〇四八頁、一六六九頁など
- 3 定遺一一頁、二三六頁、中山延二著『仏教に於ける時の研究』一章(一九六九年、百華苑刊)
- 4

〈キーワード〉 時間、三世、法華経の行者、日蓮

(東方学院研究生)